

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25360015

研究課題名(和文) ウガンダ ケニア国境地帯の政治的暴力と身体表現の関係

研究課題名(英文) Somatic Expressions During Political Violence in the Kenya-Uganda Border Region

研究代表者

波佐間 逸博 (HAZAMA, Itsuhiro)

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号：20547997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：2015年に刊行された『牧畜世界の共生論理：カリモジョンとドドスの民族誌』(京都大学学術出版会)および同年に開催された人間行動進化学会(特別セッション)において、東アフリカにおける生業牧畜社会への強権的外部介入の政治の前提的認識を崩す応用・批判的生態人類学の試みを提示した。具体的には、牧畜社会の重層的なアイデンティティという視点を共有し、牛との共生における便宜に即して選択される強力なカテゴリー形成の機序を検討した。そのうえで、牧畜民集団間における共生の知恵として、種を超える<個体主義>の定式化を試みた。

研究成果の概要(英文)：In a newly published book *Embedded Mutualism for Co-Living in African Pastoralism: Ethnographic Studies on the Karimojong and Dodoth in North-Eastern Uganda* Itsuhiro Hazama, Kyoto: Kyoto University Press, 2015, pp.312 (in Japanese), and special session of Human Behavior & Evolution Society of Japan held in 2015, applied and critical ecological anthropology was practiced to undermine that crucial assumption of external power politics against pastoralism.

研究分野：人類学

キーワード：アフリカ 牧畜 紛争と戦争 ヘルスケア 身体

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまでに、ケニア・南スーダン・ウガンダ三国国境に位置するウガンダ北東部のカリモジョンとドドスといった、半乾燥サバンナで、牛や山羊など牧畜家畜を飼い、移動性の高い生活を営む社会において、生業の成立機構に関する生態人類学的研究をおこなってきた。この地域は、1980年以降の国家的統治の消失に起因する自動小銃の普及と、2001年以降の中央政府による武装解除政策の実施によって、政治的暴力と、武装の不均衡に伴う略奪が深刻化していた。

住み込み調査の実施期間中に、自動小銃をもちいた家畜略奪によって、牧畜民集団のあいだで紛争がひきおこされているばかりではなく、これにたいする外部社会の手による秩序維持政策が、かえって地域の人びとを政治的暴力やその不安にさらしているというケースを目のあたりにしてきた。そして、国家と国際社会による東アフリカ牧畜社会にたいする従来の社会開発のあり方を再考し、これに代わる方法を解明する研究が着手されるべきであると思いついた。

本研究の先行プロジェクト「アフリカにおける低強度紛争の動態理解と平和構築に関する人類学的研究」(科研(若手B))では、まず、植民地期に形成された、牧畜民に対する啓蒙・開発意識にもとづく「説明」や「中和法」といった社会的装置をつうじて、現地住民の脱人間化が、武装解除政策下の現地社会において日常化していることを明らかにした。

さらに、社会的なレジリエンスとともに、そのレジリエンスが社会生活のうえでの秩序の持続をおびやかすリスクとなるというパラドクスも明らかになった。

武装解除政策が実施されたことによって、武装の不均衡が生じ、それによって家畜略奪紛争が激化した。そして、そのために、乳幼児の飢餓が深刻化し、難民が発生した。こうした新しい苦境に対応するために、牧畜社会の人びとは、生存上の脅威となる銃や軍隊を、社会的な価値と実践のなかにたくみに組みこむことによって乾燥サバンナでの牧畜生活をつづけていたのである。たとえば、牧民たちが本来はきわめて遊動的であった放牧キャンプを、軍駐屯地に隣接させて構築・固定し、襲撃の危険が高い夜間には国軍兵士を家畜のガードとして活用する苦肉の策を採っていた。また、不法逮捕された仲間の牧民を収容所から解放するために、婚資の家畜の構造的等価性を付与する文化的操作をつうじて自動小銃を入手し、これを軍側に「提出」していた。

いっぽう、このような苦境に適応して生存し、繁栄しさえする牧民のしたたかさは、暴力的で不条理な外部介入を持続させるリスクともなりうる。たとえば、陸軍兵士のパトロールに随行する地元牧民が、軍から自動小銃を新規にあたえられていた。また、兵士と

牧民とのあいだのバーター取引には銃と銃弾が使用され、地元の牧民たちの武器の供給源になっていたのである。

2. 研究の目的

2000年代、ウガンダ ケニア国境地帯における武装解除介入期の低強度紛争下の東アフリカ牧畜社会にあたらしく出現した病気である「暴力の病」に注目して、その病因をめぐる推論と治療の社会的過程を実証的に研究することによって、政治的暴力と身体との関係を検討し、医療人類学が焦点化してきた身体と病に関する特徴を、政治的な暴力という特定の時間文脈において再検討し、平和構築に連なるローカルなポテンシャルを抽出することを目指した。

3. 研究の方法

暴力によって引き起こされている心身の不調と生活困窮、暴力の生起と政治・社会情勢の関連を把握するために、ウガンダ北東部カーボン県のドドス社会とモロト県のカリモジョン社会において、住み込み調査によりヘルスケア・システムの解明をつづけた。

「暴力の病」は、共同体の成員が音楽運動療法とマッサージを含むさまざまな手段を用いて集合的に対処する病気である。研究開始当初は「暴力の病」を、診断と治療をつうじて患者の身体・物理性に、武装解除介入期の暴力を読み込んだ病気と予測して調査を進めた。診断と治療が焦点化するローカルな身体は現実的に顔のみえる社会形態を背景にして、政治的暴力の生存者としての「現地の文脈」を共有するメタ・エスニックな意識を形成したと考えたのである。研究の方法の中心部分には、この仮説検証があった。

4. 研究成果

(1) 問題意識の中心にあったのは、「暴力的な日常を生きる人々の暴力や死への対応には、その社会のローカルな回復と生存へのメカニズムが表出している」という社会精神医学者のダンカン・ペダーセン (Pedersen 2002) の指摘だった。フィールド調査の結果、ドドスとカリモジョンにおける「暴力の病」は共通して、人びとの身体が国家主体によって象徴的で劇的な暴力(拷問、性的暴行、文化的タブーの冒涇)の対象となる国家統制のパラドクスを解釈し、経験し、身体化し、対処する中心的なアリーナとして出現していることがわかった。飢え (erogo)、狂気の病 (ngikerep)、心臓の病 (etau) といった心身の不調は、牧畜民の身体が、自我やアイデンティティの無統制化をはかる政治的な暴力をつうじて、特定の場所や歴史という文脈から切り離され、あたらしい分類が創造され、拮抗する指示対象となってきた事態を表現していたのである。

(2) 戦争や拷問によって傷ついたカリモジョ

ンとドドスの人びとの治療は、さまざまな形をとることがわかった。具体的には、それは、暴力や復讐から、外部世界からのアクターによっておこなわれる心理療法や人道支援、また外部社会が関心をもちなくなり、そのずっと後に、共同体がみずからをいやそうと試みる方法など、多層・多用・多元にわたるのである。

カリモジョンとドドスの人びとによって認識されている暴力の病のなかでも狂気の病と心臓の病をめぐる病因の推論と治療の実践においては、さきのペダーセンの指摘にあるように「ローカルな回復と生存へのメカニズムが表出している」。そこでは、器官的な表象(「心臓 *etau*」や「血管 *ekepu*」)のなかから、病者の紛争経験の苦悩や記憶を読み取る認識論に即した形で詳細な病因論とローカルな対処方法が構築されており、外部社会から関心が寄せられなくなった紛争後の社会が、その社会自身を治療する根源的試みを創出・実践し、この「未来の方法を導き出す」文脈において、もっとも重要な問題として、抑圧者にたいする抵抗が試みられていることが明らかになったのである。

「暴力の病」はその対処の過程に人びとを動員することを介して、社会的非暴力の起点となっていた。暴力を直接経験した被害者として、あるいは身近な他者への暴力の目撃者として暴力にかかわったものにはやがてそれが伝わり、彼ら自身が暴力の行使者となる可能性があるカリモジョンとドドスはみなしている。そのような身体は、過去を忘れ、平和を保つことを強調する治療実践をとおして非暴力化されることになる。

(3) 一方、治療実践への参加者たちは病者の身体を焦点として、非暴力化に向けた相互行為を紡いでいた。この場では、参加者自身にことばと身体による介入を的確に繰り出すことが求められる。そこには病者の身体の変化を自身の身体の上に再現しながら、非暴力化の過程をたどるといった共同の経験が含まれる。つまり、治療実践の場は、病者の癒しの過程に関わる人びとと全体にとって、身体を暴力から解放する試みの場であることが示唆されたのである。

(4) 紛争社会では暴力に対処し、暴力に抵抗することは、病を治療し、予防し、より良い生を生きるために不可欠であると推察される。外部世界からもたらされる生物医療は、人びとの経験を顧みず、疾患に関連する身体内部の機能的、形態的变化だけに焦点を合わせる。そのように病を個人化・病理化する観点からすると、「原野の医療」は場当たりのであり、気慰み的であると見下されることになる。しかし「暴力の病」への対処の文脈において、抑圧や支配の力に抵抗することがきわめて重要な課題となるということをつまえるならば、対話と対面をつうじた平和創

造の努力を含む牧畜民の医療こそは根源的で理にかなったものといえる。

政治的暴力は人権と人びとの健康に強い影響をおよぼす。集団の健康問題を解明することは、暴力の影響を最小化し、平和を促進するための第一歩である。しかし、いわゆる健康増進イニシアチブに関する、広い意味での平和的な便益は突き詰めると、健康格差の解消というより一般的な課題と密接に関係している。したがって、本研究で明らかになったカリモジョンとドドスで観察された政治的暴力と身体表現の関係による非暴力の創造性は、復興と平和構築に対する保健医療活動の役割を解明し、グローバルな正義を達成するうえで貴重な示唆を含んでいるのではないだろうか。

<引用文献>

Pedersen, Duncan, Political violence, ethnic conflict, and contemporary wars: broad implications for health and social well-being. *Social Science & Medicine*, vol.55, 2002, 175-190

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

波佐閻逸博、変動する東アフリカ牧畜社会の食と記憶、多文化社会研究、査読無、2巻、2016、71-83、(査読無)
<http://hdl.handle.net/10069/36207>

波佐閻逸博、東アフリカ牧畜社会におけるヘルスケア ローカリティにもとづく医療支援に向けて、アフリカ研究、査読有、83巻、2013、17-27
DOI: 10.11619/africa.2013.83_17

〔学会発表〕(計16件)

波佐閻逸博、多元的な高齢者ケアシステムの人類学的研究、基盤研究(B)「東アフリカにおける「早すぎる高齢化」とケアの多様性をめぐる学際的研究」2015年度研究会、2016年3月16日、岡山理科大学(岡山県・岡山市)

波佐閻逸博、個体主義にもとづく共生の論理 東アフリカ牧畜民の日常生活から、AA研基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第6回公開セミナー、2015年12月18日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(東京都・府中市)

I. Hazama, Livelihood and Healthcare in East African Pastoral Societies. The International Workshop "Reconsidering the Basic Human Needs for the East African Pastoralists: Towards the Localization of Humanitarian Assistance", 2015年12月10日、グランシップ会議ホール(静岡県・静

岡市)

波佐間逸博、東アフリカ牧畜民と家畜の響存、人間行動進化学会第8回大会大会特別セッション「動物とヒトの共生」、2015年12月5日、総合研究大学院大学葉山キャンパス(神奈川県・三浦郡葉山町)

I. Hazama, Aging among Pastoralist Women: The Sharing of Bodies and Memories among the Dodoth in Northeastern Uganda. (ポスター発表)、2015 One Health Conference in Nagasaki, 2015年11月6日~7日、長崎大学医学部良順会館(長崎県・長崎市)

波佐間逸博、ウガンダ北東部の牧畜民ドドス社会の高齢者 生と死をめぐる高齢女性の役割に注目して、日本アフリカ学会第52回学術大会、2015年5月24日、犬山国際観光センター“フロイデ”(愛知県・犬山市)

波佐間逸博、東アフリカ牧畜の面白さ 定義とミルクと群れに関連して、基盤研究(A)「乳文化の視座からの牧畜論考 全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」公開シンポジウム「家畜化と乳利用その地域的特質をふまえて 搾乳の開始をめぐる谷俣説を手がかりにして」、2015年5月17日、京都大学稲盛財団記念館(京都府・京都市)

I. Hazama, Coping with the wounds of violence in Karamoja, northeastern Uganda. IUAES 2014 with JASCA, 2014年5月18日、幕張メッセ国際会議場(千葉県・幕張市)

I. Hazama, The Peace-Seeking Body in East African Pastoral Society. XV ISA World Congress of Sociology “Facing an Unequal World, Challenges for Global Sociology”, 2014年7月19日、パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)

波佐間逸博、東アフリカ牧畜社会における個体主義にもとづく共生の論理、九州人類学研究会研究発表会、2015年7月12日、九州大学箱崎文系キャンパス 21世紀交流プラザ(福岡県・福岡市)

波佐間逸博、変動する東アフリカ牧畜社会の食と記憶、第3回多文化社会学研究会「グローバル化する食文化とローカリティの変容 味覚の世界から考える多文化状況」、2015年11月6日、長崎大学文教キャンパス総合教育研究棟多目的ホール(長崎県・長崎市)

I. Hazama, Bodily Power at Work in Everyday Practices. XV ISA World Congress of Sociology “Facing an Unequal

World, Challenges for Global Sociology”, 2014年7月15日、パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)

波佐間逸博、暴力に抵抗する医療 ウガンダ北東部カラモジャにおけるカリモジョンとドドスの事例から、日本アフリカ学会第51回学術大会、2014年5月24日、京都大学(京都府・京都市)

I. Hazama, Security Enforcement and Local Creativity of Peace in Karamoja, Northeastern Uganda. The Third Forum on “Comprehensive Area Studies on Coexistence and Conflict Resolution Realizing ‘African Potentials’” “Peacebuilding and ‘African Potentials’: Harmonizing Approaches from Above and Below in South Sudan and Beyond”, 2013年12月8日、ジュバ(南スーダン)

波佐間逸博、東アフリカ牧畜社会の世界認識とヘルスケア、牧畜研究会、2013年9月22日、望洋荘(長崎県・雲仙市)

波佐間逸博、ヘルスケアの果てる場所、東アフリカ牧畜社会、日本アフリカ学会第50回学術大会、2013年5月26日、東京大学大学院総合文化研究科(東京都・目黒区)

〔図書〕(計4件)

波佐間逸博、京都大学学術出版会、牧畜世界の共生論理 カリモジョンとドドスの民族誌、2015、312

波佐間逸博 他、ナカニシヤ出版、動物と出会うII: 心と社会の生成、2015、3-26

I. Hazama 他、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity、2016、41-57

I. Hazama 他、Cambridge Scholars Publishing, Embodiment and Cultural Differences. 2016(刊行予定)、122-143

〔その他〕

ホームページ等

<http://research.jimu.nagasaki-u.ac.jp/IST/ISTActId=FINJPDdetail&ISTKidoKbn=&ISTErrorChkKbn=&ISTFormSetKbn=&ISTTokenChkKbn=&userId=100000374>

日本アフリカ学会創立50周年記念企画アフリカ・トーク「牧畜家畜と人間の共生的関係」
<https://www.youtube.com/watch?v=71-q7HP6qRk>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

波佐間 逸博 (HAZAMA, Itsuhiro)
長崎大学・多文化社会学部・准教授
研究者番号：20547997